【土木史研究　第11号　1991年6月　自由投稿論文】

土木技術者の顕彰に関する基礎的研究

北見工業大学　　正会員　　中　岡　良　司

Honor of Civil Engineers

by Ryoji Nakaoka

概　要

本研究は、土木技術者の顕彰事例に関して、アンケート調査および現地調査等の結果をとりまとめたものである。調査の結果、全国から１９２件の事例が報告された。本研究では、それらを有形と無形の顕彰に分類し集計するとともに顕彰所在地の分布も示した。その結果、さらに調査は継続される必要があるものの、初めて全国的な顕彰の実態が明らかとなった。

事例分析においては、特色ある顕彰例としてファン・ドールン、デ・レーケ、田辺朔朗、青山士、青函トンネルと瀬戸大橋、Ｒ．Ｈ．ブラントンの６例を取り上げ、より詳細な内容を示すとともに、顕彰行為に含まれる問題点および今後の課題等について言及した。

(Key Words ： 顕彰、土木技術者、事例分析)

１．はじめに

顕彰とは、かくれた功績などを明らかにし広く世間に知らせて表彰することである。今日、我々は全国のいたるところで、土木技術の発展に貢献した先達の面影を銅像や記念碑あるいは資料館などに見ることができる。しかしながら、どこで、誰が、どんな形で顕彰されているのかを体系的に調査した例は、著者の知る限り皆無である。そこで、本研究は機会を得て実施した土木技術者の顕彰事例調査の結果を中心に全国の顕彰の実態を明らかにするものである。

顕彰のもっとも代表的な形態である銅像に関しては、1959（昭和34）年、真田秀吉（第21代土木学会会長）が土木学会誌に寄稿し27例を記している[1]。その解説文は「‥‥此内銅像については、之を諸書に見たり友人に聞いたりして次表を得た。但し調査漏れも多々あるべし、他日を待つこととする。」と結ばれている。本研究は、必ずしもその期待に応え得るものではないが、顕彰の基本的形態とその事例を明らかにできた点において、今後望まれる組織的な全国調査の基礎資料としての価値を有するものと思われる。

土木史と常に対比される建築史においては、顕彰という事例はほとんど見られない[2),3)]。顕彰とは、土木事業の公共的性格と相まって土木工学特有の現象とも言えるのである。近年、土木施設の保存と再生論議が活発となってきたが[4),5)]、構造物の保存と再生という観点に加えて、それを計画し実現してきた土木技術者そのものの評価も忘れてはならないであろう。

２．土木技術者の顕彰事例調査

（１）調査の概要

本調査は、全国の関係機関および土木史関係者に広く問いかける形で実施した。調査にあたっては、十分に調査の趣旨を述べるとともに、対象となる土木技術者の範囲においては、土木工学の関係分野名

および「土木と２００人」（後述）のリストを示した。

調査内容は、顕彰された「土木技術者名」、その「所在地」、「顕彰内容」、「問い合せ先」の４項目にとどめ、厳密さ以上に広範な情報の収集に努めた。なお、調査票には10名分の記述欄を設けたが、回収の結果、最大で39件の記述者もいた。

配布先は以下の６０６ケ所の全国の関係機関および個人である。

① 中央官庁、都道府県庁土木部　３１ケ所
② 都道府県教育委員会　８０ケ所
③ 都道府県博物館協会および協議会　４５ケ所
④ 全国高等学校土木系学科　３１２校
⑤ 「土木と２００人」執筆者　１３８人

調査は平成２年３月１日に実施し、同年４月30日までの期間に99通の回答を得た（回収率16.3%）。99通の回答の内「該当者なし」との回答が37通あったが、これも顕彰実態を知る上では有用な情報である。１名以上の土木技術者名の記入があったのは62通である。また、関係資料が添付されていた場合には該当者を抜きだした。その結果、重複した内容を含み全 324件の顕彰事例を入手した（一部、顕彰候補者を含む）。重複者を除き、既に何らかの顕彰が行われている事例は 192件（個人および団体）であった。その一覧を表－１に示す。

（２）顕彰リスト

表－１は、回答のあった土木技術者名をすべて列挙したものである。すなわち、きわめて地域的な功労者もわが国の土木技術の発展に顕著な功績のあった土木技術者も混在している。両者を差別化することは必ずしも適当なことではないが、顕彰という社会的行為から見れば、より後者の存在に注目せざるを得ない。過去、土木学会誌では２回にわたり「土木と１００人」[6)]、「続土木と１００人」[7)]の特集を組んでいる。合計「土木と２００人」である。その学術的評価は未だに下されてはいないが、顕著な功績のあった土木関係者という点では衆目の一致した所であろう。そこで、顕彰事例一覧においても「土木と２００人」該当者には◎記号を付した。

（３）顕彰者マップ

図－１は、顕彰事例の所在地に基づき作成した全国顕彰者マップである。ただし、当然のことながら、関連書籍や受賞などは場所が特定できないため除いてある。図は本調査が全国的に実施されたことを示しているが、全国47都道府県のうち、栃木県、富山県、奈良県、和歌山県、広島県、山口県、香川県、愛媛県、大分県、宮崎県、沖縄県の11県に関しては事例がなかった。これらの県に事例が皆無であるのか、調査が行き届いていないのか（その可能性が大きいが）、現時点では不明である。また、秋田県、山形県、福岡県などは他に較べ事例が多いが、これらはもっぱら調査協力者の熱意の現れのようである。

以上のことから、顕彰者マップは必ずしも顕彰実態そのものを現しているというよりも、調査の現在の状況を現していると受けとめるべきであろう。

（４）顕彰形態

これまで、土木技術者にどのような顕彰が行われてきたのであろうか。回答内容を分類した結果、顕彰形態は大きく有形と無形に分類することができた。

１）　有形の顕彰

有形の顕彰形態には、銅像、胸像、レリーフ、記念碑、顕彰碑、記念館、資料館、神社がある。いま、その比率を示すならば表－２の通りである。一人の技術者が複数の形態で顕彰されている場合があるので、比率は反応パーセントで算出した。すなわち、銅像については、全顕彰者 192名のうち52名の銅像があり、その比率は27.1%である。

全顕彰者に関してはもっとも多い顕彰形態は記念碑・顕彰碑であり、顕彰者全体の約６割に碑がある。一方、「土木と２００人」に限れば、もっとも多い顕彰形態は銅像であり、全体の約半数は銅像となっている。銅像、胸像、レリーフはいずれも個人の肖像を残すものである。その観点から銅像、胸像、リレーフを合わせると、全顕彰者の約40%、「土木と

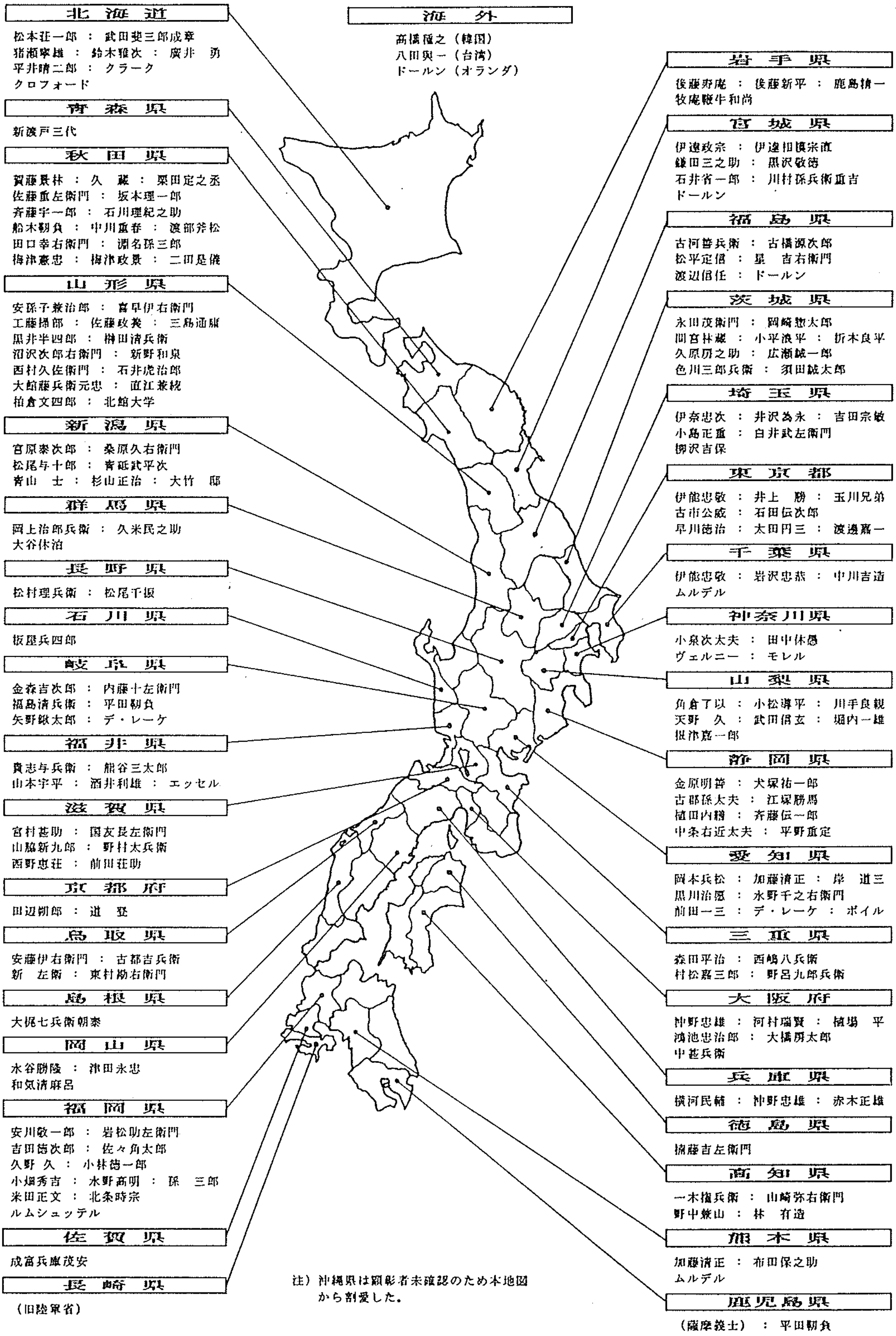
表－２　有形の顕彰

顕彰形態	全顕彰者（１９２件） 件　反応%	「土木と200人」（５０人） 人　反応%
銅　像	５２（27.1）	２６（52.0）
胸像・レリーフ	２４（12.5）	１１（22.0）
記念碑・顕彰碑	１１３（58.9）	１９（38.0）
記念館・資料館	１０（ 5.2）	５（10.0）
神　社	２３（12.0）	８（16.0）

表－1　顕彰リスト

（５０音順）
青砥武平次（像）
◎ 青山　士（碑）
◎ 赤木正雄（像）
麻生与惣右衛門（碑）
安孫子兼治郎（胸,碑）
天野　久（胸,碑）
安藤伊右衛門（碑）
◎ 井沢為永（碑）
石井省一郎（名）
石井虎治郎（碑）
◎ 石川栄耀（名）
石川理紀之助（神）
石田伝次郎（碑）
◎ 板屋兵四郎（神）
一木権兵衛（神）
◎ 伊奈忠次（碑）
犬塚祐一郎（碑）
◎ 伊能忠敬（像,碑,書）
◎ 井上　勝（像）
井上令作（賞）
猪瀬寧雄（碑）
岩崎敏夫（賞）
岩沢忠恭（碑）
岩松助左衛門（碑,書）
植田内膳（碑）
植場　平（像）
梅津憲忠（碑）
梅津政景（碑）
江塚勝馬（碑,館）
大梶七兵衛朝泰（像）
太田円三（胸）
大竹　邸（館）
大谷休泊（碑）
大館藤兵衛元忠（像）
大橋房太郎（碑）
岡上治郎兵衛（碑,神）
岡崎惣太郎（碑）
岡本兵松（像）
◎ 沖野忠雄（胸,碑,書）
奥津春生（賞）
小畑秀吉（像）
折本良平（碑）
柏倉文四郎（胸,碑）
◎ 鹿島精一（胸）
◎ 加藤清正（像,神）
賀藤景林（神）
金森吉次郎（像）
鎌田三之助（像）
川手良親（碑）
◎ 河村瑞賢（碑）
◎ 川村孫兵衛重吉（像）
◎ 岸　道三（胸）
貴志与兵衛（碑）
北館大学（像,碑,神,名）
喜早伊右衛門（像,碑）
久　蔵（碑）
◎ 金原明善（像,胸,碑
館,神,書）
楠藤吉左衛門（碑）
工藤掃部（碑）
国友長左衛門（碑）
◎ 熊谷三太郎（胸）
久米民之助（胸,碑）
栗田定之丞（碑,神）
黒井半四郎（碑,神,行）
黒川治愿（碑）
黒沢敬徳（碑）
桑原久右衛門（碑）
小泉次太夫（碑）
◎ 鴻池忠治郎（像）
古郡孫太夫（行）
小島正重（碑）
小平浪平（胸,碑,館）
古都吉兵衛（碑）
小林徳一郎（胸）
小松導平（碑）
◎ 後藤新平（像,館）
後藤寿庵（像,館,行）
斉藤宇一郎（館,神）
斉藤伝一郎（碑）
酒井利雄（像）
榊田清兵衛（像）
坂本理一郎（碑）
佐々角太郎（碑）
佐藤重左衛門（碑）
佐藤政養（像）
色川三郎兵衛（像）
正子重三（書）
白井武左衛門（碑）
白石直治（書）
新　左衛（碑）
杉山正治（碑）
鈴木雅次（碑）
須田誠太郎（碑）
◎ 角倉了以（碑）
高橋穏之（碑）
田口幸右衛門父子（碑）
◎ 武田斐三郎成章（碑）
◎ 武田信玄（像）
田中休愚（碑）
◎ 田辺朔郎（像,碑）
◎ 玉川兄弟（像,碑）
伊達相模宗直（名）
◎ 伊達政宗（像）
津田永忠（像）
東村勘右衛門（碑）
◎ 道　登（碑）
内藤十左衛門（碑）
直江兼続（碑）
中甚兵衛（像,碑）
中川吉造（碑）
中川重春（碑）
中条右近太夫（碑,神）
永田茂衛門（碑）
◎ 成富兵庫茂安（像,碑,行）
新野和泉（碑）
◎ 西嶋八兵衛（碑,神）
西野恵荘（碑）
西村久佐衛門（碑）
二田是儀（神）
◎ 新渡戸三代（館）
沼沢次郎右衛門（碑）
◎ 根津嘉一郎（像）
◎ 野中兼山（像,神）
野村太兵衛（碑）
◎ 八田與一（像,行）
早川徳治（像）
林　有造（像）
久野　久（像）
久原房之助（胸,碑）
◎ 平井晴二郎（胸）
◎ 平田靭負（像,胸,碑,神）
平野重定（碑）
◎ 廣井　勇（像）
広瀬誠一郎（碑）
福島清兵衛（碑）
◎ 布田保之助（像,神,行）
淵名孫三郎（碑）
船木靭負（碑）
◎ 古市公威（像,名）
古河諦兵衛（碑）
古橋源次郎（碑）
北条時宗（神）
星　吉右衛門（書）
堀内一雄（碑）
牧庵鞭牛和尚（像）
前田一三（胸）
前田荘助（碑）
孫　三郎（碑）
松尾千振（碑）
松尾与十郎（像）
松平定信（像,神）
松村理兵衛（碑）
◎ 松本荘一郎（胸）
◎ 間宮林蔵（像,館）
三島通庸（碑）
水谷勝隆（碑）
水野千之右衛門（碑）
水野高明（碑）
宮原泰次郎（碑）
宮村甚助（碑）
村松嘉三郎（碑）
森田平治
・野呂九郎兵衛（碑）
安川敬一郎（胸）
柳沢吉保（名）
矢野鉄太郎（碑）
山崎弥右衛門（神）
山本宇平（像）
山脇新九郎（碑）
◎ 横河民輔（碑）
◎ 吉田徳次郎（碑）
吉田宗敏（碑）
米田正文（胸）
◎ 和気清麻呂（像,神）
渡部斧松（碑,神）
渡辺信任（像,碑）
◎ 渡邊嘉一（名）
◎ エッセル（館,国）
◎ クラーク（像,胸）
◎ クロフォード（胸）
◎ デ・レーケ（像,胸,碑
書,国）
◎ ドールン（像,碑）
◎ パウナル（賞）
ベルツェル（賞）
ボイル（碑）
ムルデル（碑）
◎ モレル（像）
ルムシュッテル（胸,賞）
◎ ワデル（賞）
ヴェルニー（胸）
（旧陸軍省）（碑）
（港湾功労者）（賞）
（薩摩義士）（像,碑,神）

注）1．◎印は「土木と２００人」該当者
2．( )内は顕彰形態　‥‥　像：銅像　胸：胸像・レリーフ　碑：記念碑・顕彰碑　館：記念館・資料館　神：神社
書：書籍　行：行事　国：国際交流　名：命名　賞：受賞


北海道
松本荘一郎 ： 武田斐三郎成章
猪瀬寧雄 ： 鈴木雅次 ： 廣井　勇
平井晴二郎 ： クラーク
クロフォード
青森県
新渡戸三代
秋田県
賀藤景林 ： 久　蔵 ： 栗田定之丞
佐藤重左衛門 ： 坂本理一郎
斉藤宇一郎 ： 石川理紀之助
船木靭負 ： 中川重春 ： 渡部斧松
田口幸右衛門 ： 渕名孫三郎
梅津憲忠 ： 梅津政景 ： 二田是儀
山形県
安孫子兼治郎 ： 喜早伊右衛門
工藤掃部 ： 佐藤政養 ： 三島通庸
黒井半四郎 ： 樹田清兵衛
沼沢次郎右衛門 ： 新野和泉
西村久佐衛門 ： 石井虎治郎
大館藤兵衛元忠 ： 直江兼続
柏倉文四郎 ： 北館大学
新潟県
宮原泰次郎 ： 桑原久右衛門
松尾与十郎 ： 青砥武平次
青山　士 ： 杉山正治 ： 大竹　邸
群馬県
岡上治郎兵衛 ： 久米民之助
大谷休泊
長野県
松村理兵衛 ： 松尾千振
石川県
板屋兵四郎
岐阜県
金森吉次郎 ： 内藤十左衛門
福島清兵衛 ： 平田靭負
矢野鍬太郎 ： デ・レーケ
福井県
貴志与兵衛 ： 熊谷三太郎
山本宇平 ： 酒井利雄 ： エッセル
滋賀県
宮村甚助 ： 国友長左衛門
山脇新九郎 ： 野村太兵衛
西野恵荘 ： 前田荘助
京都府
田辺朔郎 ： 道　登
鳥取県
安藤伊右衛門 ： 古都吉兵衛
新　左衛 ： 東村勘右衛門
島根県
大梶七兵衛朝泰
岡山県
水谷勝隆 ： 津田永忠
和気清麻呂
福岡県
安川敬一郎 ： 岩松助左衛門
吉田徳次郎 ： 佐々角太郎
久野　久 ： 小林徳一郎
小畑秀吉 ： 水野高明 ： 孫　三郎
米田正文 ： 北条時宗
ルムシュッテル
佐賀県
成富兵庫茂安
長崎県
（旧陸軍省）
海外
高橋龍之（韓国）
八田與一（台湾）
ドールン（オランダ）
岩手県
後藤寿庵 ： 後藤新平 ： 鹿島精一
牧庵鞭牛和尚
宮城県
伊達政宗 ： 伊達相模宗直
鎌田三之助 ： 黒沢敬徳
石井省一郎 ： 川村孫兵衛重吉
ドールン
福島県
古河善兵衛 ： 古橋源次郎
松平定信 ： 星　吉右衛門
渡辺信任 ： ドールン
茨城県
永田茂衛門 ： 岡崎惣太郎
間宮林蔵 ： 小平浪平 ： 折本良平
久原房之助 ： 広瀬誠一郎
色川三郎兵衛 ： 須田誠太郎
埼玉県
伊奈忠次 ： 井沢為永 ： 吉田宗敏
小島正重 ： 白井武左衛門
柳沢吉保
東京都
伊能忠敬 ： 井上　勝 ： 玉川兄弟
古市公威 ： 石田伝次郎
早川徳治 ： 太田円三 ： 渡邊嘉一
千葉県
伊能忠敬 ： 岩沢忠恭 ： 中川吉造
ムルデル
神奈川県
小泉次太夫 ： 田中休愚
ヴェルニー ： モレル
山梨県
角倉了以 ： 小松導平 ： 川手良親
天野　久 ： 武田信玄 ： 堀内一雄
根津嘉一郎
静岡県
金原明善 ： 犬塚祐一郎
古郡孫太夫 ： 江塚勝馬
植田内膳 ： 斉藤伝一郎
中条右近太夫 ： 平野重定
愛知県
岡本兵松 ： 加藤清正 ： 岸　道三
黒川治愿 ： 水野千之右衛門
前田一三 ： デ・レーケ ： ボイル
三重県
森田平治 ： 西嶋八兵衛
村松嘉三郎 ： 野呂九郎兵衛
大阪府
沖野忠雄 ： 河村瑞賢 ： 槇場　平
鴻池忠治郎 ： 大橋房太郎
中甚兵衛
兵庫県
横河民輔 ： 沖野忠雄 ： 赤木正雄
徳島県
楠藤吉左衛門
高知県
一木権兵衛 ： 山崎弥右衛門
野中兼山 ： 林　有造
熊本県
加藤清正 ： 布田保之助
ムルデル
鹿児島県
（薩摩義士） ： 平田靭負
注）沖縄県は顕彰者未確認のため本地図から割愛した。

図－1　顕彰者マップ

表－3　無形の顕彰

顕彰形態	全顕彰者（192件）		「土木と200人」（50人）	
	件	反応%	件	反応%
書籍	8	(4.2)	4	(8.0)
行事・祭り	6	(3.1)	3	(6.0)
国際交流	2	(1.0)	2	(4.0)
命名	7	(3.6)	3	(6.0)
受賞	8	(4.2)	2	(4.0)

２００人」の約74%が肖像を残している。記念館・資料館は十分な資料の蓄積がなければ設立が困難であろう。神社という顕彰形態は治水関係の事例に見られる。過去、自然を治めた土木技術者はついには神となって崇められたのである。

２）無形の顕彰

無形の顕彰は、本調査の段階では、その数は表－３の通り少ない。調査回答者にとって顕彰の範囲が明確でなかったことが大きな原因と考えられる。したがって、無形の顕彰に関してはその形態がほぼ出揃った事を成果としたい。以下では、実例を通じて顕彰内容をみる。

ａ．書籍

真田秀吉が86才にして書き上げた『沖野博士伝』は良く知られている。また、北九州市小倉北区の白洲燈台建設に私財を投げ打った岩松助左衛門に関しては、尋常小学校読本『白洲の燈台』が作成されている。伊能忠敬に関しては関連図書も多いが、千葉県学校教育教材研究会が小中学校向けの副読本『伊能忠敬』を発行している。最近の事例では、1987（昭和62）年に木曽三川治水百周年記念として『デ・レーケとその業績』が刊行された。また、小説等の一般書には、『京都インクライン物語』（田村喜子、新潮社）、『台湾を愛した日本人　－嘉南大圳の父　八田與一の生涯－』（古川勝三、青葉書房）などがある。

ｂ．行事・祭り

後藤寿庵に関しては水沢市福原の寿庵廟にて毎年寿庵祭が行われている。成富兵庫茂安に関しては北茂安町白石にて毎年兵庫さん祭が、布田保之助に関しては布田神社（昭和11年建立）にて毎年祭礼が催され子供相撲が奉納されている。海外の事例では、台湾の烏山頭の農民が八田與一の命日に追悼会を催している。

ｃ．国際交流

国際交流を顕彰と考える点については異論もあろうが、永くあるいは広範囲に名をとどめる意味では顕彰の一形態と考えたい。ファン・ドールンおよびデ・レーケに関しては後述する。治水技術者エッセルに関しては、1981（昭和56）年、福井県三国町立郷土資料館の開会式に子孫が来日した。同資料館はエッセルの設計を復元したものである。

ｄ．命名

命名に関しては調査が行き届いていない。相模土手、北楯大堰、古市文庫、嘉一文庫、石井閘門、石川賞（都市計画）などが挙げられているが、今後の調査次第で事例は増えるであろう。

ｅ．受賞

命名同様、別種の調査を企画しなければならないほど事例が多い。受賞も顕彰の一形態であることは確かであるが、その範囲を限定する必要があろう。今回の調査では勲三等瑞宝章、河北文化賞、港湾功労者表彰などが記されている。

（５）　顕彰分野

どのような専門分野の技術者が顕彰されているのであろうか。そのためには、適切な専門分野区分とその分野への関わりの程度を調べる必要があるが、それは専門領域が細分化している今日の土木工学技術者においても難しい。そこで、各々の土木技術者が何を専門としていたかという観点ではなくて、どのような専門分野の業績を評価され顕彰されてきた

表－4　顕彰分野

顕彰分野	全顕彰者	「土木と200人」
河川	92件 (47.9 %)	19人 (38.0 %)
鉄道	12 (6.3)	7 (14.0)
橋梁	10 (5.2)	5 (10.0)
新田開発	10 (5.2)	0 (0.0)
港湾	9 (4.7)	1 (2.0)
道路	6 (3.1)	1 (2.0)
建設業	5 (2.6)	4 (8.0)
その他	48	13
合計	192件 (100 %)	50人 (100 %)

かという観点から顕彰者と専門分野の関係を分析してみることにする。表－４はその結果である。

全顕彰者および「土木と２００人」該当者ともに主な顕彰分野は河川を中心として鉄道、橋梁と続いている。河川関係者の割合は全顕彰者の約５割、「土木と２００人」該当者の約４割を占めており、土木工学の領域の広さを考えるときわめて高い割合となっている。かって、小川博三[8]は「日本における土木事業はつねに水との対決であった」とわが国の土木技術と水との関わりを強調している。それは単に河川事業にとどまらずトンネル工事、ダム工事においても共通していることではあり、古代から今日までの土木事業の足跡においては常に治水事業が主流を為していた。とりわけ、農業国としてのわが国においては、治水・利水事業によって直接的に生活文化の向上がはかられた例は数多く、農民（国民）による土木技術者（治水技術者）の顕彰に結びついたと考えられる。

３．事例分析

前章の調査結果の中から特徴的な顕彰事例に関して、本章では現地調査や関係資料に基づきさらに詳細な分析を試みる。

（１）　ファン・ドールンの顕彰

ファン・ドールンの顕彰は、①偶像化された技術者であること、②繰り返し顕彰されてきたこと、③関係市間の国際交流を実現したことに特徴がある。

オランダ人技師ファン・ドールンは、1872（明治５）年、日本政府の招きで来日し、利根川、淀川、信濃川などの河川改修をはじめ、野蒜港、函館港など数多くの港湾建設に携わった[9]。1878（明治11）年には安積疏水工事の設計を行い、同工事は1879（明治12）年に着工し1882（明治15）年に完成した。同工事の設計・施工における実質的な指導者は南一郎平であり[10]、ドールンも疎水の完成を見ることなく帰国の途についている。明治新政府の第１号国営事業であった安積疎水工事の着手には土木局長工師（技師長）ドールンの設計案が必要であった。ドールンの安積疎水への技術的影響は薄いが、安積疎水工事設計者ドールンは、その後、再三の顕彰を受けることになる。

１）銅像建立

図－２　ファン・ドールン像
出典：広報こおりやま（１９９０年９月号）
銅像は高さ2.4m、台座を含め約6mの巨像。
右手前は再建墓碑（在アムステルダム市）

1931（昭和６）年、仙石　貢、東京電灯株式会社（現東京電力株式会社）、安積疏水普通水利組合が協力しファン・ドールンの銅像が建立された[11]。

仙石　貢は、鉄道院総裁、第７代土木学会会長、鉄道大臣、南満州鉄道株式会社総裁を歴任した明治・大正期の鉄道大功労者である[12]。氏の財政的基盤となった猪苗代水力発電株式会社の成功は安積疏水に負うところが大きいことから、ファン・ドールンの銅像建立を発案したという。銅像は疎水水門を見守る位置に建立され今日に至っている。仙石氏は除幕式に立ち会うことなく病死した。また、太平洋戦争に伴う供出の際には、ドールンの銅像は郡山市民が一夜のうちに隠して守り通したという話が伝わっている[13]。

２）墓碑再建

1978（昭和53）年７月、ドールンの生地を訪ねた小学校教諭によって、アムステルダム市のドールン

の墓石が撤去されていることが判明した。ただちに、郡山市長を中心とする「ファン・ドールン墓碑再建委員会」が結成され、翌年6月、オランダの地にドールンの墓碑が再建されるに至った[14]。

外国での墓碑再建という初の顕彰に郡山市は全市をあげて取り組んで、総費用約3千万円（当時）は一般募金によって集められた。われわれは、このことから郡山市民の安積疎水への関心の高さとドールンへの愛着を知ることができる。

3）国際交流

墓碑再建におけるアムステルダム市との度重なる往復書簡、事前調査、現地での供養祭を通じ、郡山市民はドールンの母国オランダおよびアムステルダム市を知り、アムステルダム市民は無名の治水技術者ドールンの異国での偉業に想いをはせた。その後、1987（昭和62）年には、ファン・ドールン生誕150周年記念事業を通じて、ドールンの生地であるブルメン市と郡山市は友好都市の縁組みを行った[15]。交流は現在も続いている。

以上のドールンの銅像および再建された墓碑の様子を図－2に示す。これは、調査で同地を訪れた時期に発行されていた1990（平成2）年9月号の郡山市の広報誌の表紙である。同市とドールンの結びつきの深さの一端がうかがわれる。

（2）　デ・レーケの顕彰

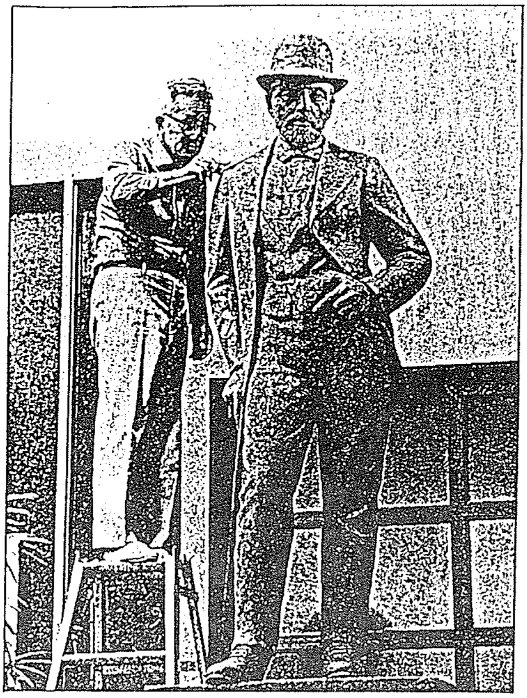
デ・レーケの顕彰は、①広範な記念事業の一環として顕彰したこと、②業績の学術的評価をおこなったことに特徴がある。

オランダ技師デ・レーケは、1873（明治6）年にお雇い外国人として来日し、1903（明治36）年までの約30年の長きにわたってわが国の港湾、河川技術の指導にあたった。港湾では大阪港、三国港、広島港、福岡港、長崎港、仙台港など全国の港湾施設を手がけ、河川においては、淀川、木曽川、常願寺川などの改修に活躍した。とりわけ、日本の治水技術者を長く苦しめてきた木曽三川の改修計画はその功績が高く評価されている[16]。

1）木曽三川治水百周年記念事業

デ・レーケの顕彰は1987（昭和62）年に木曽三川治水百周年記念事業の一環として実施された。記念事業の全体は以下に示す通りきわめて広範囲に及ぶ。

◎オープニング式典　　◎記念式典



図－3　デ・レーケ像

出典：『デ・レーケの業績と評価』[17]、P230

制作しているのは三枝惣太郎（日展彫刻家）

・明治改修着工の碑　　◎デ・レーケ顕彰

◎デ・レーケの業績図書出版　・記念誌の刊行

・木曽川文庫開設　　・映画

・記念切手　　・大崖砂防堰堤の保存と整備

・クリーン・ザ・長良川　　・記念植樹

・展望案内板の設置　　・河川案内板の設置

・水源地登山　　・作品募集

・風景の会展　　・撮影会

・展示会　　・シンポジウム

・講演会　　・木曽三川サミット

・水祭り　　・体験交流会

・スポーツ大会　　・木曽三川公園開設

このうち、デ・レーケの顕彰に関係するものには◎印を付した。

オープニング式典において、デ・レーケのレリーフ碑を建立するとともに除幕式典を実施した。式典にはオランダ大使館の総領事が列席している。また、船頭平公園内に等身大のブロンズ象が建立された。参考になる肖像写真はわが国では発見できず、オラ

ンダに住むデ・レーケの子孫の提供で初めて実現したという。

２）業績図書

デ・レーケ研究会（会長：井口昌平、事務局長：島崎武雄）により『デ・レーケとその業績』（昭和62年10月、非売品）が編集された[17]。同書は、デ・レーケの業績はもとより、誕生からその子孫に至るまでの人間的側面にも言及したデ・レーケ研究の集大成となっている。

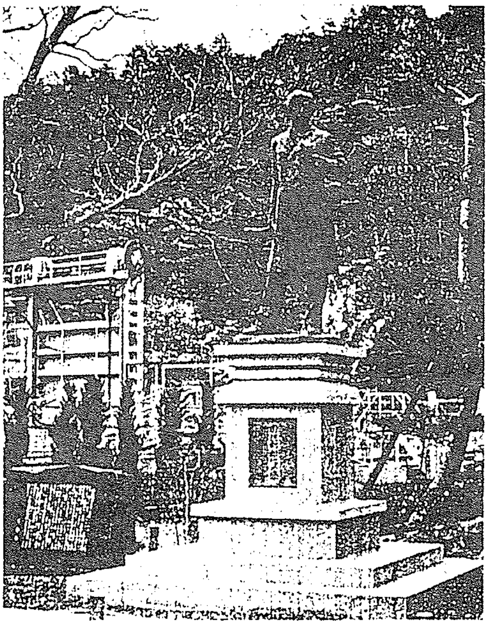
デ・レーケ像の概要を図－３に示す。

（３）田辺朔郎の顕彰

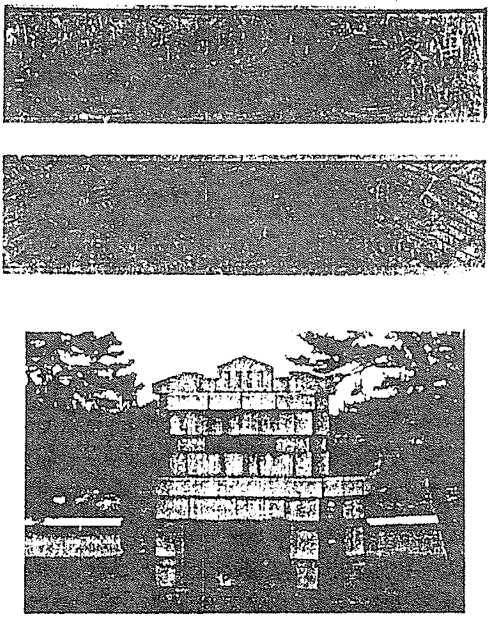
田辺朔郎の顕彰は、その顕彰形態に特徴があるのではなく、その扱いに特徴がある。いわば、消されようとしている顕彰の事例である。

田辺朔郎は、明治期の土木技術者を代表する存在であり多方面で顕著な功績を残している。中でも最大の業績は、工部大学校卒業直後に取り組んだ琵琶湖疎水事業である。その詳細はあまりに著名であるため他に譲るが[18]、銅像は記念の地である京都のインクラインを見おろす位置に建てられている（図－４）。土木技術者の諸像において、もっとも良く知られている銅像といってもよいであろう。

1990（平成２）年は第１疎水が完成して１００周年にあたる。これを記念し琵琶湖疎水百周年事業として各種の行事が行われた。また、疎水の意義を伝え先人の偉業を顕彰する目的で琵琶湖疎水記念館が建設された。記念館は田辺朔朗個人をあらためて顕彰しようとするものではない。まったくその反対の意図を持った施設である。来館者に配布されるリーフレットには、測量技師の島田道生、画家の田村宗立の名はあっても田辺朔朗の文字は一切使われてはいない。その名は疎水年表においても見ることはない。数百m離れた田辺朔朗像への案内も行われていない。関係者によると、これまであまりに琵琶湖疎水事業における田辺朔朗の功績が強調されてきたのでその反省に基づくものであるという。たしかに、琵琶湖疎水事業は目的税をはじめとして京都市民の大きな負担のもとで完成した。しかし、田辺朔朗という偉大な技術者を得てはじめて実現した難事業であったことも確かなことである。後に、イギリス土木学会が田辺にテルフォード賞を贈ったのも故なきことではない。われわれは、ここに、あまりの偉大



図－４　田辺朔朗像
（　出典：文献16）P38　）



図－５　大河津分水補修記念碑と碑文
出典：上段の碑文は大河津資料館提供
下段の写真は文献16）P85

さの故にその名を消されようとしている土木技術者の事例を見ることができる。

（４）青山　士の顕彰

青山　士は実際には顕彰されてはいない。ただ碑文を残しているのみである。その意味では、本研究の顕彰事例からは大きく異なった存在である。ここでは、顕彰されなかった事例として紹介したい。

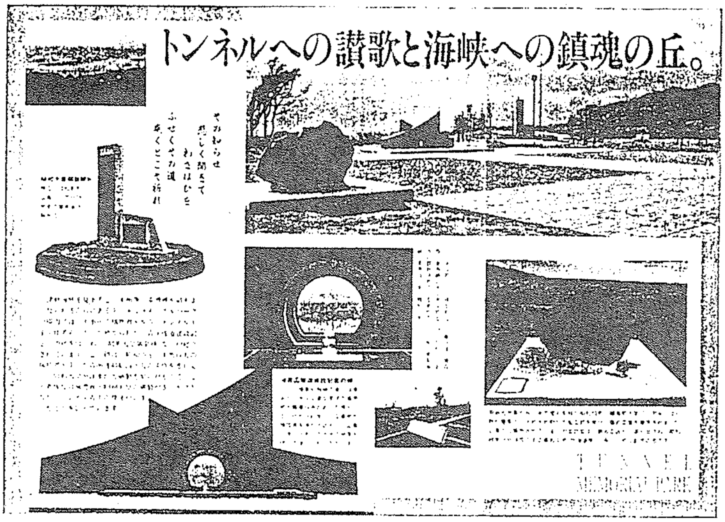
青山　士は、ただ一人の日本人としてパナマ運河工事に従事したほか、荒川放水路や大河津分水工事を完成に導いた人物である。大河津分水補修工事の実質的な技術者は宮本武之輔であり、青山は当時の土木出張所長であったが、大河津分水補修工事記念碑に刻まれた「万象ニ天意ヲ覚ル者ハ幸イナリ，人類ノ為メ国ノ為メ」の碑文はあまりに有名である(図－５)[19]。

1980（昭和55）年９月23日は氏の生誕１００周年であったが、いずれの地においても顕彰事業は行われなかったようである。博愛主義者としての氏の信条をおもんばかっての関係者の配慮とも思われるが、顕彰は個人的行為としてばかりでなく、その業績を広く社会に残す意味合いも有している。その意味で同氏の顕彰が実現されなかったことが悔やまれる。

（５）青函トンネル・瀬戸大橋の顕彰

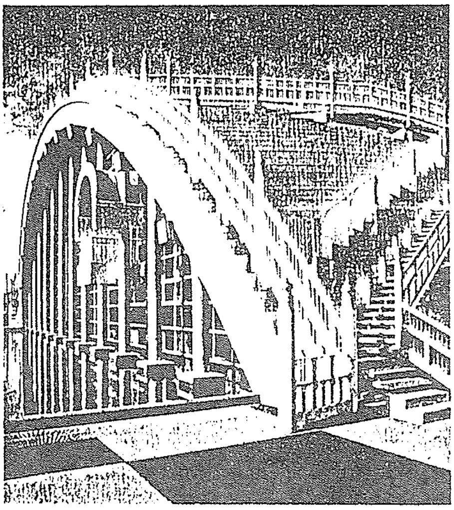
近年の青函トンネルおよび瀬戸大橋の完成では、いかなる顕彰が行われているのであろうか。両者を通じて、大事業における今日の顕彰の状況を考察してみたい。

青函トンネルは1964（昭和39）年に工事に着工し、約23年の歳月をかけ1987（昭和62）年に完成した今世紀最大の海底トンネルである。同工事を記念して、工事半ばの1973（昭和48）年には青函トンネル記念館が建設され貴重な資料等の収集が行われてきた。また、完成後は、津軽海峡を見下ろす北海道福島町のトンネルメモリアルパークに青函隧道建設記念の碑が建立された（図－６）が、これは工事犠牲者への慰霊碑に相当するものである。青函トンネルの場合、技術者の名はいっさい表に現れてはいない。



図－６　青函隧道建設記念の碑

出典：青函トンネル記念館配布資料。右上パノラマの左から、工事着工記念の石、青函隧道建設記念の碑、昭和天皇御製碑



図－７　瀬戸大橋架橋記念館

出典：瀬戸大橋架橋記念館配布資料

建物全体は太鼓橋をかたどっている

瀬戸大橋は合計10橋から成る橋梁群である。1978（昭和53）年に着工し1988（昭和63）年に完成した。本州と四国を結ぶ他の２ルートの工事は現在も進行中であるが、瀬戸大橋の完成を記念し、1988（昭和63）年には瀬戸大橋架橋記念館が建設された（図－７）。同記念館は別名「橋の博物館」とも呼ばれ、橋の歴史を模型を通じて伝えている。瀬戸大橋の模

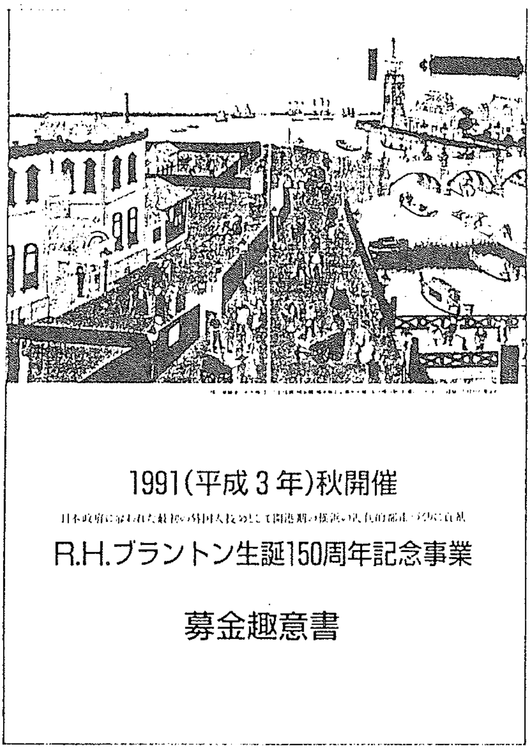
型も展示されているが、展示内容全体は瀬戸大橋をとくに強調したものではない。当然、関係した技術者の名は残されていない。

上記２例に見られるように、世界的大事業においても、今日では土木技術者の名を残すことは難しいようである。その背景には、特定の指導的技術者の欠如や複雑な請負機構の存在があろう。

（６）ブラントンの顕彰

ブラントンの顕彰は現在進行中の事例である。

Ｒ．Ｈ．ブラントンは、1868（明治１）年、明治政府のお雇い外国人第１号として来日し、1876（明治９）年に解雇されるまでの約８年間にわたり、わが国に西洋の土木技術を伝え土木の近代化に貢献した人物である。ブラントンは燈台の建設技師として招かれ主要な燈台の建設に従事したが、その後、横浜を中心に橋梁、都市計画、上下水道、公園などあらゆる設計・施工に従事した[20]。 1991（平成３）年は、ブラントンの生誕１５０周年にあたるため、横浜市は記念事業を計画している。そのため、横浜



図－８　ブラントン顕彰の募金趣意書
（出典：ブラントン記念事業実行委員会提供）

市は1989（平成１）年に土木学会にブラントンに関する調査研究を委託した。土木学会はこれに応え、特別委員会を設置し、1990（平成２）年に報告書を提出した。ブラントンの業績は高く評価され、顕彰が行われることになった。既に、記念事業費の募金が開始されており（図－８）、現在の計画では、胸像や記念碑の建設および母国である英国でのメモリアルの建設が行われる予定である。すなわち、ファン・ドールンやデ・レーケの顕彰を範として、学術調査、胸像・記念碑の建立、国際交流が果たされることとなる。

４．まとめ

本章では、第２章での顕彰事例調査および第３章での事例分析を通じての総合考察を述べるとともに、今後の顕彰のあり方について言及する。

① 顕彰事例調査によって、全国の１９２名の顕彰事例が判明した。重複した内容および顕彰形態が不明で除いた例も多いが、有形の顕彰事例に限っても、総計２２２件の報告が為された（表－２）。さらに調査を進めることで事例は増えようが、基本的な顕彰形態およびその比率は大きく異なることはないであろう。

② 有形の顕彰では、記念碑・顕彰碑の建設が一般的であるが、土木学会誌で特集した「土木と２００人」のいわゆる著名な土木技術者に限れば銅像の建立が多かった。今後行われるであろう顕彰事業においては、まず銅像の建立の是非が検討されることになろう。

③ 無形の顕彰に関しては、その範囲が明確になった段階である。とりわけ、関連書籍、命名、受賞に関しては別種の調査を企画する必要があろう。

④ 最近の顕彰事例では、お雇い外国人の顕彰が顕著である。戦争で供出された銅像のすべてが復元されているわけではない。いま一度、日本人技術者の顕彰を検討する必要がある。

⑤ 統計学における仮説検定の考えを借りるならば、顕彰にも２種の過誤がある。功績がないのに顕彰する過ちと功績があるのに顕彰しない過ちである。いずれの過ちも正していく必要はあるものの、研究者としてはより後者に熱心でありたい。そのためには十分な土木史研究の蓄積が必要である。

⑥　土木技術者の評価は土木事業の評価と同様に難しいものがある。その困難は評価基準そのものにもあるが、対象を限定できない点にこそ最大の困難がある。幸い、土木技術者に関しては既に土木と２００人がリストアップされている。その学術的再評価が必要である。

５．おわりに

本研究では、土木技術者を対象におもに個人的顕彰を対象としてきた。しかしながら、土木事業という集団的行為からみれば個人的顕彰に反感を覚える者も少なくないであろう。大事業であればあるほど実際に現場で活躍する無名の技術者も多い。しかし、土木の世界は、これまで基本的に技術者の名を社会に残そうと努めてきたであろうか。集団、地位という名目の下で顕著な功績のある技術者までも埋もれさせてきたのではなかろうか。そのような技術者を発見し正当に評価するのも土木史研究の課題の一つと考えられる。

顕彰という行為は、その顕彰者の個人的名誉としてばかりでなく、その事業の存在と技術の重要性を後生に伝える役割を担っている。それは、土木技術者の社会的地位の向上にも通じるものがある。本研究が今後の土木技術者の顕彰の一助となれば幸いである。

【謝辞】

土木技術者の顕彰事例調査は、著者も参画したＲ．Ｈ．ブラントンに関する調査研究委員会の下で実施した。さらに、調査にあたっては土木史研究委員会の協力も得た。長尾義三委員長（日本大学理工学部教授）をはじめとする両委員会の委員・幹事各位に感謝の意を表します。また、多忙の中、調査に協力していただいた全国各地の土木史研究者および行政機関にも謝意を表します。とりわけ、病床の身にありながら参考文献をご紹介いただいた故飯吉精一氏には感謝の念が絶えません。ご冥福をお祈り申し上げます。

なお、本研究は北海道大学工学部五十嵐日出夫教授のご指導を仰ぎました。土木史を人間的側面から見よとは先生の指摘であります。また、土木学会事務局五老海正和氏には終始ご助言を賜りました。記して謝意を表します。

【参考文献】

１）真田秀吉：土木関係者の銅像、土木学会誌、VOL.44-12、P73～74、1959.12
２）太田博太郎：『日本建築史序説』、彰国社、1990.8、増補第２版1989.1
３）村松貞次郎：『日本建築家山脈』、鹿島出版会、1985.12、初版1965.10
４）特集：胎動する土木の保存、日経コンストラクション、VOL.15、1990.5
５）特集：近代土木の保存と再生、土木学会誌別冊増刊、VOL.75-14、1990.11
６）特集：土木と１００人、土木学会誌、VOL.68-9、P2～53、1983.8
７）特集：続土木と１００人、土木学会誌、VOL.69-6、P2～53、1984.6
８）小川博三：『日本土木史概説』、共立出版、P3、1975.12
９）前掲６）、P22
10）須田熙・小林真勝：野蒜築港と安積疏水の歴史的変遷、日本土木史研究発表会論文集、VOL.9、P155～163、1989.6
11）ファン・ドールン先生銅像建設会：『ファン・ドールン先生』、1932.10
12）前掲６）、P31
13）鶴見正夫：『かくされたオランダ人』、金の星社、1974
14）ファン・ドールン墓碑再建委員会：『ファン・ドールン墓碑再建』、1980.3
15）ファン・ドールン生誕１５０年記念事業実行委員会：『ファン・ドールン生誕１５０年記念事業報告書』、1988.3
16）前掲６）、P23
17）建設省中部地方建設局木曽川下流工事事務所：『デ・レーケとその業績』、1987.9
18）中川　大：琵琶湖疎水百年、前掲５）、P34～P40
19）大熊　孝：大河津分水、前掲５）、P85
20）土木学会：『Ｒ．Ｈ．ブラントンに関する調査研究報告書』、1990.9